

広がるパソコン通信の役割

経済学部経済学科 伍賀 一道

今回のソ連クーデター失敗の要因の一つは、情報通信網を何よりも先に確保することを重視しなかった保守派の戦略の古さにあると言われている。情報通信手段を掌握することが緊要であることは資本主義のもとでもまったく同じである。市場競争に勝利するためには、いかに正確な情報をだれよりも早くつかむかにかかっており、そのために今日ではパソコン通信によるさまざまなデータベースが登場している。経済学部では、数年前から日経TELECOM（「日本経済新聞」）に加入しているが、これをつかって新聞記事の検索をしていると、その最中にピッという警告音とともにニュース速報がつぎつぎと画面に表示される。株式や為替取引を担当している企業のディーラーたちはこの速報をにらみながら相場の動きを予測して、売買の判断を瞬時に行わなければならない。

このようにコンピュータをベースにした通信手段は当初はもっぱら経済活動の分野で活用されてきた。ところが、数年まえより、これらの手段を市民が自分たちのネットワークづくりのために利用しようとする草の根の動きが全国で見られるようになった。さらに、最近では、もっと広く、たとえば障害をもった人達の社会参加を促進するための手段として活用しようとする試みが盛んになっている。

たとえば、目の不自由な人の場合でも、パソコンの画面の文字が音声になって聞こえてくる装置が開発されて（大文字は男性の声で、小文字は女性の声でというように）、それほど不自由なくパソコンを利用できるようになった。より重度の障害者であれば、まばたきを入力の手段にすることもできるらしい。パソコンを障害者が個々に利用するだけでも、自分の意志を相手に伝えることが随分と楽になったが、それに止まらず、パソコン通信を利用して障害をもつ人達が手をつなごうという試みが各地で登場している。つぎの新聞記事はその一例である。

「パソコン通信を身体障害者のコミュニケーションの道具にしよう、という取り組みが少しずつ広がっている。大阪市と社会福祉法人大阪市障害者更生文化協会は、このほど、リハビリテーションを市民講座のテーマに取り上げ、シンポジウムと、障害者のパソコン通信を助ける器具を中心にした機器展を開いた。

「我々障害者にとって、コミュニケーションの手段を確保するのは、失われかけた人間らしさを取り戻すことです」。シンポジウムに参加した岐阜県郡上郡の上村数洋さん（40）は、こう話した。7年前、交通事故でけいついを損傷し、首から上しか動かせない。だが、マウススティック式の呼気スイッチと電子ペンをくわえて専門のキーボードを操り、1年前からパソコン通信を始めた。障害者にとって、趣味を越え、社会への窓、そして社会参加の手段にもなりうる。

この1, 2年の機器の発達が目覚ましい。手や足の不自由な人のためには、キーボードを打ちやすくするための補助具や、まばたきやあごの動きだけでも操作できるシステムができた。目の不自由な人には、点字キーボードや、画面の文字を合成音声で読み上げる装置もある。機器展には約40点が展示された。3日間の会期中、パソコン通信体験コーナーのディスプレイ画面には、全国の障害者からメッセージが寄せられた。」（「朝日新聞」1988年11月8日付）

さらに、次のような事例もある。点字に翻訳する作業をパソコンを使って行おうという試みである。これまでであれば、専用の点字印字機を用いるのが通例であったが、パソコンに入力して文章を校正したあとで、点字プリンターにつなげばミスも極めて少なくすることが可能になる。また、パソコン通信のネットワークを活用して点字翻訳のデータベースを構築する試みが始まっている。ある人がこれから点字翻訳しようとする本をすでに他の誰かが点訳しているか、どうかをパソコン通信で確認できる。こうすれば同じ本をダブって点訳することも防げる。

しかし、よいことばかりというわけではない。こうした機器をそろえるには高額な費用を要する。視力障害者は、パソコン一式と、画面の文字を合成音声で読み上げる装置で50万円以上かかる。現在のところ、国は上肢障害者などの生活用具としてワープロに限り4万円の補助金を支給しているという。もっともっとこれらの機器が普及して、多くの障害者の社会参加が実現し、ネットワークでお互いに情報交換ができるよう国の補助を強化することが求められている。

パソコン通信を無線で行う試みが企業ベースでも本格化するなど、情報通信の発達は私たちの想像をこえるスピードで進んでいるが、これらの恩恵に浴することのできる人びとがさらに多くなることを期待したい。